天橋立における歴史的景観の変遷と地域住民の景観評価に関する研究

A Study of Historical Landscape Changes and Landscape Evaluation by the Local People in Amanohashidate

深町加津枝* 奥 敬一*

Katsue FUKAMACHI Hirokazu OKU

Abstract : Amanohashidate is an outstanding landscape in Miyazu, Kyoto Prefecture, which is based on natural forms of a sand spit and row of pine trees, harmonizing natural and human elements. At the same time, it has played a role as a unique local landscape in the daily lives of the local people. In this study, we clarified features of the historical landscape in Amanohashidate and its subsequent changes after the Meiji period, focusing on (1) changes in the sand spit and pine rows of Amanohashidate, and (2) changes in the view points and landscapes of Amanohashidate. Also, we evaluated the landscapes of the local people, and discussed future landscape management of the area. Resulting from the evaluation, it can be seen that the local people are strongly attached to their landscapes, which are close and frequently used in their daily lives. They take a strong interest in not only the scenery, but also the quality of the environment. They wish to have both the conservation and the recovery of pine groves and landmark trees, which are nearby and representative of their local environment. On the other hand, we found differences in the desired landscapes and feeling of different residential areas especially with newly developed landscapes.

Keywords: Historical Landscape, Local People, Landscape Evaluation, Landscape Management, Amanohashidate

キーワード: 歴史的景観, 地域住民, 景観評価, 景観管理, 天橋立

1. はじめに

日本三景の1つである天橋立は、砂嘴が発達した自然地形とクロマツを中心とする松並木を基盤とし、寺社や集落など人文的要素と、四季折々の移ろいゆく自然の姿が調和している傑出した景観である。成相寺や智恩寺など有名寺社の参拝の地に近接した天橋立は、古来より人の往来が絶え間なくあり、さらに、天橋立について詠まれてきた多数の和歌や俳句、紀行文が旅の目標ともなり、多くの文人墨客が訪れる契機ともなっていた¹⁾。

図絵に描かれた天橋立で現存する最古のものは、本願寺三世覚如(1270~1351)の一代記として作成された藤原隆昌による「慕婦絵詞」であり、覚如が成相寺に参拝する際に天橋立を訪れ、その時に目にした景観が描かれている²⁾。室町時代の後半になると雪舟による「天橋立図」が描かれた。その後、江戸時代前期には厳島や和歌浦など他の名所と組み合わせた「天橋立図屏風」など、季節折々の表情や名所に遊興する人々の姿が描かれた多数の作品が生み出された³⁾。天橋立は、天然の奇勝としての地形、そしてそれに基づく伝説と、名所として卓越した魅力をもった景観として全国的に認知されていたのである。

このような江戸期までの図絵では、天橋立の砂嘴や周辺の寺社、山林などにクロマツが描かれるが、名松が目立って描かれるものや、マツの形態が強調されて描かれたもの、大胆に簡略化されたものなど、図絵によって様々な松林景観の様相がみとれる。天橋立を望む主要な視点としては、成相寺周辺、栗田峠、大内峠がある。これら3つの視点から望む景観は、「天橋立三絶」として広く認識されてきた⁴⁾⁵⁾。特に大内峠から望む天橋立の景観は、もっとも古くからの天橋立の展望地点として広く知られている。

天橋立は、中世以降、智恩寺や宮津藩主などにより「無双霊境」、「天下無双の絶境」の地として位置づけられてきたが、江戸時代の記録などから幾度となく橋立切断の危機が繰り返されてきた⁶⁾。明治期の近代的土地所有制の成立過程の中では「公園」が創設され、天橋立は1873年(明治6年)の太政官布達第16号により

「地盤国有公園」に指定された。その後も1922年(大正11年)に「名勝」指定され(1927年には「特別名勝」に変更)、1955年(昭和30年)の都市計画公園決定では「天橋立公園」となり、また同年に「若狭国定公園」に指定されるなど、長年にわたる多種多様な法指定の歴史を経てきた。明治期以降、天橋立は公有地として法制度下で景観の保全あるいは利用対象として明確に位置づけられてきたが、それとともに都市化、観光開発などが進み、天橋立の歴史的景観は大きく変化していった。

藤岡⁷⁾は、「歴史的景観」について「今なお現存する歴史的な人文景観」とする概念を示し、この視点は、過去と現代の連続に深い注意を払う歴史地理学の中で引き継がれていった⁸⁾。ここでいう歴史的景観の保全の論理は、1つの時代がそれ以前の景観をいかに受けつぎ、あるいは改変し、否定したかをふまえ、現代に残った過去の景観をいっくしみ、可能な限り現代に積極的に生かす道を考えることを特徴としている。

本研究においては、この概念をふまえ、さらに今後の景観計画につなげる立場から、公有地となり法制度による景観保全体制下に移行した明治期以降の天橋立における歴史的景観の変遷について、特に、①天橋立の砂嘴および松並木、②天橋立を望む視点とそこからの景観、という観点から明らかにすることを目的とする。また、天橋立およびその周辺の景観の形成と変遷に深く関わってきた地域住民を対象に景観評価を行い、歴史的景観の保全と利用の方向性を明確にするものとした。これらの結果をふまえ、将来にわたって日本三景としての歴史的景観を引き継いでいくとともに、地域住民にとって日常生活域にある地域固有の景観として、今後の景観管理がどうあるべきか、今日の行政施策をふまえながら検討する。

2. 研究方法

(1) 天橋立における歴史的景観の把握

図-1には、天橋立周辺における主要な視点や観光名所を示す。

* (独)森林総合研究所関西支所

図-1 天橋立周辺の主要地点、地名

京都府宮津市に位置する天橋立は、大天橋（1998年現在での都市公園域で延長2,410m、面積187,949㎡）、小天橋（延長830m、面積49,364㎡）、第二小天橋（延長410m、面積8,552㎡）、傘松（延長120m、面積5,043㎡）により構成される。文化財保護法に基づく「特別名勝」には、これらに智恩寺の社寺周辺部が加わり、また、自然公園法に基づく「若狭湾国定公園」ではさらに周辺の海岸線や森林などが加わった範囲となる。

天橋立における歴史的景観の把握では、2002年11月～2003年10月に、地域住民に対する聞き取り調査、関連する行政や専門家に対する聞き取り調査、そして現地調査を行った。地域住民に対する聞き取り調査は、「天橋立を守る会」会長、事務局長をはじめ、地元で適任と推薦していただいた12名の住民を対象に行った。関連行政や専門家に対する聞き取り調査では、京都府（公園緑地課および森林保全課）、宮津土木事務所、京都府立丹後郷土資料館、宮津市歴史資料館を対象にし、同時に関連資料や地図、写真などの収集も行った。聞き取り調査の項目は、天橋立周辺の景観の変化状況、ランドマーク木の特徴、天橋立を望む視点とそこからの景観の特徴、天橋立周辺の住民組織とその活動、歴史的景観を受け継いでいくための具体的な方策、天橋立周辺を対象にした行政施策や事業についてであった。

天橋立周辺の歴史的景観の変遷の把握に用いた資料は、明治後期～昭和前期に発行された絵はがき（写真によるもの、一部戦後発行のものも含む）合計 461 枚（宮津市歴史資料館所蔵）、観光案内書および既存文献である。天橋立周辺における明治期以降の歴史の概観の把握には、地元で発行された資料^{9) 10) 11) 12) 13) 14)}を用いた。また、明治後期～昭和前期に発行された多くの絵はがきは、宮津市歴史資料館に所蔵されており、本研究では、絵はがきの内容に基づき、当時の天橋立周辺の景観の特徴、天橋立を望む主要な視点の位置やその特徴を読み取って分類し、今日の景観の特徴や視点の特徴と比較した。絵はがきは、撮影された景観や説明文に基づき、①主要な視点からの天橋立の景観、②近距離景としての砂嘴を対象にした景観、③視点を砂嘴上とする景観、④名松、⑤寺社・史跡、⑥人工構造物（橋など）、⑦木造建築物、⑧河川・滝、⑨町並み、⑩生業・行事の場面、に区分した。以上の複数の区分の内容を同等に含む場合は、番号の若い項目を優先させた。

また、2002年5月～2003年9月に延べ15日間の現地調査を行い、天橋立を望む主要な視点やそこから望む景観の特徴、観光船や主要道路、ハイキング道からの天橋立の見え方、天橋立の松並木や周辺の利用状況、マツ枯れ被害の状況について把握した。

(2) 地域住民に対する景観評価

地域住民による景観評価は、天橋立周辺に居住し、天橋立に強い関心をもった地域住民として位置づけられる「天橋立を守る会」の会員を中心とする 200 名の住民を対象に、アンケート調査によって行った。「天橋立を守る会」は、1965 年に組織された一般有志の会員約 200 名からなる任意団体で、特別名勝天橋立を保護し、後世に継承していくため、環境美化、愛護運動の推進、利用施設の整備促進等の事業を展開している。会員のほとんどは、宮津市の天橋立周辺に在住の住民や行政、ホテルや会社など施設、組織の代表であり、そのほか、近隣の岩滝町や野田川町、加悦町などに居住する若干の会員がいる。

アンケート調査は2003年1～2月に郵送により実施し、回収数は110通（回収率55%）であった。男女別で見ると、男性76名、女性32名、不明2名より回答があった。年代別で見ると、20代が3%、30代8%、40代14%、50代33%、60代20%、70代13%、80代9%であった。また、本研究では、回答者を居住地に基づき、文珠（宮津市字文珠）、府中（宮津市字大垣、江尻、中野、難波野）、宮津海岸（宮津市字魚屋、新浜、鶴賀、万年）、宮津内陸（宮津市万町、住吉、宮村、柳縄手、松原、惣、本町、馬場先、木ノ部、吉原）、その他に区分した。居住地区区分ごとの回答者の数は、文珠33名、府中20名、宮津海岸19名、宮津内陸23名、その他10名、不明5名であった。

アンケートの内容は、天橋立周辺で一番好きな景観とその理由、歴史的景観として重要だと思う場所、今後も残していきたいマツそして景観上の課題についてであった。また、天橋立を望む代表的な5つの視点から撮影した5枚の写真を用い、自然性、美しさ、身近さ、好ましさ、観賞意志からなる5つの評価軸による7段階景観評価を行った。評定値は評価が高い順序から7点～1点に数値化し、それぞれの平均値を求めた。平均値の差の検定では、分散分析を用い、多重比較が必要な場合はチューキーの方法によった。なお、景観の距離区分として、樋口¹⁵⁾による基準に基づき、近距離景（視点から240m未満）、中距離景（視点から240～4,400m）、遠距離景（視点から4,400m以上）とした。

3. 天橋立における明治期以降の歴史的景観の変遷

(1) 天橋立の砂嘴および松並木の変化

天橋立はクロマツという単独の種が優占する特徴的な松林景観であるが、砂浜にあるハマナスの開花や積雪、夕焼けなど、気象の違いや四季の変化によって、あるいは一日の時間帯によって様々な表情をみせる。また、天橋立の背景となる山々や海、田畑などは、自然の変化とともに、そこに暮らす地域住民の生業や年中行事、来訪者の活動と結びついた人文景観を呈してきた。

今回用いた明治後期～昭和前期の絵はがきにおいても、天橋立およびその周辺の四季折々の表情や、変化に富んだ人文景観、そして人々の様子が様々な角度からとらえられていた。合計 461 枚あった絵はがきの内訳は、①主要な視点からの天橋立の景観が 148 枚、②近距離景としての砂嘴を対象にした景観が 25 枚、③視点を砂嘴上とする景観が 24 枚、④名松が 42 枚、⑤寺社・史跡が 108 枚、⑥人工構造物（橋など）が 35 枚、⑦木造建築物が 30 枚、⑧河川・滝が 14 枚、⑨町並みが 13 枚、⑩生業・行事の場面が 12 枚、その他 10 枚であった。①主要な視点からの天橋立の景観に次いで絵はがきの枚数が多かったのは、成相寺や智恩寺などの⑤寺社・史跡、次いで、千貫松などの④名松であり、廻旋橋や旅館などの⑥人工構造物あるいは⑦木造建築物も多かった。

天橋立の歴史的景観では、基盤となる砂嘴とともに松並木や名松が不可欠な要素であり、砂浜や海、あるいは周辺での漁師の姿や、図-2のような行き交う船の様子といった人々の生業の様子など、絵はがきの中に多様な景観がとらえられた。また、宮津八景、阿蘇海十勝など、天橋立周辺の数々の名所や事象の移ろいの感興が和歌¹⁾などとして詠まれていた。松並木の中やその周辺にはランドマーク木となる名松があり、これらは高齢で大木であったり形状に特徴があり景観上で目立っていたり、地名や伝説などに基づく愛称があるものであった。名松の中で絵はがきに多くみられたのは、傘松公園にある傘松、千貫文目の価値がある千貫松、龍燈の松(図-3)、大正天皇お手植えの松であり、1970年頃までの旅日記や観光案内書には、それらに加え夫婦松、船越の松、二本松、三本松、片枝の松などが紹介されていた。

寺社・史跡の絵はがきが多いのは、天橋立への旅の歴史をみれば、その第一の目的は寺社参詣であったことからもうなずける。また、廻旋橋、大天橋、そして天橋立周辺に位置する木造高級旅館は、天橋立の砂嘴や周囲の松並木、名松などを背景に特徴的な人文景観を形成し、観光資源としても重要な役割を果たしていた。

天橋立は、1922年に史跡名勝天然記念物保存法による「名勝」に指定されたが、その際の内務省による通牒においては、その景観上の特徴について「内湾ニ於ケル砂嘴トシテ唯一ノモノナリ、加フルニ白砂青松ノ美景ヲ以テス 磯清水神社及ヒ智恩寺ノ境内ハ全体ノ風景ヨリ分ツヘカラサルモノニ属ス、成相山上部ノ郡有山林ニハ地ヲ拓キテ小亭ヲ設ケタルアリ、天橋ヲ望ムニ好適ノ地点ナリトス」と記述される。このことから、天橋立の歴史的景観の保全において重要なことは、①内湾の砂嘴があること、②白砂青松の美景であることに加え、③智恩寺など関連する人文景観が一体であること、④天橋立を望む好適な視点があること、と解釈できる。

その後、様々な法指定に基づく行政上の景観保全体制が整っていった一方、天橋立の骨格ともいべき砂嘴や松林景観、そして天橋立の景観と一体となった周囲の人文景観は大きく変化し、歴史的景観の保全上での深刻な問題をかかえるようになった。

まず、府中側の天橋立の砂嘴については、江戸時代に地元の漁業者が死活問題として砂嘴切断を請願し続けたが⁶⁾、明治期以降になっても魚介類が死滅していることへの対応として、切断すべきとの提案がなされた。結果的に切断されることなく今日に至るが、漁業者にとっての不都合だけでなく、船舶の通行上、あるいは内海の水質の問題などから、砂嘴を人為的に切断するか否かの議論が繰り返されてきた。

昭和初期以降になると、砂防・河川改修工事による流出土砂が減少し、また、沿岸漂砂を遮断する構造物が砂の流れの

上手側に設置されて漂砂が到達しなくなり、天橋立の砂嘴の砂浜がやせ細り、多くの松の根が露出するようになった。京都府では1951年以降、突堤の設置やサンドバイパス工法(上手側に堆積した漂砂を下手側の海岸に人工的に移動させる養浜工)などの対応策を施し、砂嘴の形状は次第に回復されつつある。また、1970年以降、松林調査や土壌改良などにより松の保存対策を実施してきた。

また、天橋立およびその周辺における急激な都市化、観光形態の変化は、明治後期頃の絵はがきにみられた景観の様相を大きく変えていった。明治期からの大規模な埋め立てや観光開発などにより、天橋立周辺の地形的な骨格は大きく変化し、住民の多くが農業や漁業を中心とした生業から観光業に移行し、水田や舟屋など農漁村景観は消えていった。大正期には廻旋橋によって小天橋と文珠間が連結され、ケーブルカーやリフトの開設、さらに最近の鉄道や高速道路の開通により、人々の交通手段は船や人力車、駕籠から、鉄道や観光バス、自家用車へと変化した。天橋立周辺の海岸線沿いに多数の観光施設やホテル、大規模な駐車場が出現し、都市的な要素が色濃くなった。旅館など木造建築の多くは鉄筋やモルタルに替わり、「名勝」に指定された当時の歴史的景観を特徴づけてきた人文景観の面影は薄れていった。そして、天橋立八景などに登場した多様な名所が開発により消失し、人々の記憶から忘れ去られるなど、歴史的景観のあり方は大きく変化した。

さらに、天橋立周辺にみられたアカマツが優占する松林景観においても、1948年頃からのマツノザイセンチュウによるマツ枯れが多発し、戦後には常緑広葉樹林化や竹林、スギ・ヒノキ人工林の拡大により松林面積が激減した。一方、天橋立においては、最近の雪害やマツ枯れにより減少傾向はあるものの、2000年頃まで比較的若齢のマツの本数が増加し、密度も高くなってきた。

1954年の天橋立公園(傘松は除く)の松林調査¹⁶⁾では、天橋立にクロマツ、アカマツなどの直径10cm以上のマツが合計4,432本あり、1934年の調査に比べると全体の樹種が7種から12種に増加したこと、そして樹木の本数が2割増加したことが報告されている。同報告書では、大径木が枯死したあと若齢のクロマツが植樹され、胸高直径48cm以上ある大径の一級木が5割減少した一方、胸高直径32~47cmの二級木が4割増加したことが記されている。その後の天橋立公園(傘松も含む)の胸高直径10cm以上のマツの本数は、1974年に4,720本、1988年5,144本、2002年4,937本と推移してきた(宮津土木事務所内部文書による)。

天橋立公園では、砂嘴の侵食や雪害、マツ枯れなどによる被害により著しくマツが枯死したり、樹勢が弱くなった1970年、1985年などには現況調査に基づく保護管理対策や、クロマツを中心とする植樹が行われてきた。1985年の調査¹⁷⁾では、保護管理対策として、マツ枯れに対する薬剤散布、土壌改良などの必要性が示された。2001年には、天橋立にある約5,200本のマツ(主にクロマツ)のうち約150本が枯死するという被害にみまわれた。また、周辺の松林に対しては、「松くい虫被害対策事業推進計画」(京都府)に基づく対応がなされてきたが、今日までに大部分のアカマツ林が消失した。天橋立公園内のマツについては、2001年度に「天橋立公園保全対策」として京都府が補正予算1億6千万円を計上し、4,800本のマツに樹幹注入による薬剤処理するなどの緊急措置を講じた。その後もマツ枯れに関する調査研究、薬剤によるマツ枯れ防除、周辺の森林内の枯死木の除去などの対策が進められている。

天橋立やその周辺にある千貫松などの名松は、地域の身近で大切なランドマークあるいは観光資源として、明治期より絵はがきや観光案内書などで頻繁に紹介されてきた。1980年代になると名松に対する関心が地元や行政の中で急速に高まり、1984年に京都府が古木対策により枯枝の伐採や幹巻などを実施した。また、

図-2 天橋立と行き交う船の景観

玄海庵からの眺望、右下隅に名松として
慕われてきた龍燈の松が見える。

図-3 大正頃の絵はがきにみる文珠地区

股のぞきや袖のぞきなど多様な観賞形態があった。

図-4 大正頃の絵はがきにみる
傘松からの展望

図-5 絵はがきに見る桜山からの眺望

としての天橋立の景観を楽しんでおり、天橋立を望む視点は必然的に旅の途中で通過する大内峠や栗田峠などの峠、阿蘇海などの船上、成相寺、籠神社、智恩寺などの寺社周辺に集中していた。天橋立を望む代表的な3つの視点、梶峠（現在の大内峠）、傘松、栗田峠からの景観は「三絶」あるいは「三大観」と称され、景観研究の対象ともなってきた¹⁸⁾¹⁹⁾。

今回用いた明治後期～昭和前期の絵はがきにある、①主要な視点からの天橋立の景観148枚についてみると、最も枚数が多かったのは傘松公園周辺から望む天橋立の景観で108枚あった。続いて成相寺周辺からの景観が16枚、玄妙庵からが12枚、桜山からが12枚であった。傘松公園周辺の絵はがきの内訳は、傘松公園から望む景観が43枚、それとともに、図-4に示したような、袖のぞきや股のぞきなどをした人物、駕籠にのった旅行者が同時に写されたものが58枚、傘松御休憩所からの景観が7枚であった。成相寺周辺の内訳は、成相寺ケーブルカー・登山道沿いからの景観が7枚、弁天山からが5枚、成相寺展望台からが4枚であった。智恩寺周辺など比較的近景からの天橋立の松並木や砂浜を対象にした絵はがきも多かったが、大内峠や栗田峠からの景観はほとんどみられず、明治期以降になり、「国有地盤公園」あるいは「名勝」となった天橋立を望む視点は、遠景としてよりも身近にあって観光ルートや都市公園としての整備も進んだ傘松公園に限定されていたものと考えられる。

傘松公園には傘松という名松があり、成相寺への参拝道の途中にある茶亭の周辺に位置し、ここからの景観は「斜め一文字」あるいは「天橋立の股のぞき」と呼ばれ、眼下に天橋立およびその周辺の宮津湾、阿蘇海、大江山連峰などが写され、逆さになって眺めると天地が逆転し、天に架かる浮き橋のように見える絶景である。これは、民俗社会学の観点からは、時間的、空間的境界を含め日常の外側にあって本来見ることができない世界を、股のぞきや袖のぞきの向こうに透かして見ている、ととらえられる²⁰⁾。

絵はがきの視点の大部分が傘松公園周辺に集中するのは、明治期以降、天橋立公園や国定公園に組み込まれるなど行政施策の中で天橋立における利用拠点と位置づけられたこと、そして、民間の投資によるケーブルカーの開通など、大規模な観光開発が行われてきたことと深い関連がある。また、明治後期になって傘松に

ある御休憩所に皇太子（大正天皇）が訪れたことは、大正期の絵はがきの説明文の1つに「今上陛下モコ、迄オ登リニナツタ」と書かれるなど、この地からの天橋立の景観の知名度を高めるものであったといえよう。

傘松公園周辺以外で天橋立を望む視点としては、文珠側に位置する桜山や玄妙庵があった。桜山は、頂上付近に神社があり、大正期には茶屋があったことから、地域住民や観光客のほか、宮津湾に寄港した船の軍人などが立ち寄った展望地であった。1921年の吉見豆人による「天橋紀行」の中では、「梶峠と傘松と櫻山とそして丹後富士とを天橋四大観と云ふさうだがその中では櫻山で見たのが一番感じがよい。」¹⁾とあるなど、天橋立を望む視点としての桜山（図-5）の名は、この頃の旅日記や観光案内などに頻繁に登場した。一方、「梶嶺志」²¹⁾においては、天橋四大観として、栗田峠、大内峠、成相山、櫻山があげられていた。

玄妙庵の名前は、1386年に足利義満が智恩寺に参拝した際にこの地を訪れ、「ああこれまさに玄妙なるかな」と詠嘆したことに基づく。玄妙庵からの景観は「四大観」の1つとの記述が昭和前期の絵はがきにもみられ、昭和天皇がこの地を訪れ宿泊している。1970年頃には「天橋立五大観」が、傘松、玄妙遊園、大内峠、滝上遊園、獅子崎からの天橋立の景観という記述もみられる²²⁾。

1970年にレジャー施設である天橋立ビューランドが開園されると、そこから天橋立を望む景観「飛龍観」は、その後観光パンフレットや大判ポスターなどに頻繁に登場するようになった。「飛龍観」は、龍が天に向かって飛ぶように見えることから名付けられ、最近では「股のぞき観（斜め一文字）」、「一字観」、「雪舟観」とともに「四大観」といわれる²³⁾。このように、明治期以降、「四大観」、「五大観」など、天橋立の代表的な景観の視点についての呼び方や、その内容は固定したものではなく、人によってあるいは時代によって若干の差異があった。なお、「雪舟観」は、雪舟の「天橋立図」の視点と同様であると誤解されることがあるが、「天橋立図」とは異なる景観である。

「天橋立十景」は、1986年に宮津商工会議所が中心になって公募を行い選定した、天橋立を望む10の景観である。選定された10箇所の景観の名称およびそれを見るための視点は、「雪舟観（斜め一文字・雪舟観）」（視点となるのは獅子崎展望所、視点から天橋立中心部の「夫婦松」周辺までの距離は約2,140m）、「島崎蒼龍観」（島崎公園、3,290m）、「戦国ロマン八幡山」（八幡山、4,640m）、「滝上弓ヶ観」（滝上山、2,930m）、「飛龍観」（文珠山、1,790m）、「文殊の智恵海道」（智恩寺、1,140m）、「一字観」（大内峠、5,000m）、「天平の歴史みち」（国分寺跡、1,680m）、「股のぞき（斜め一文字）」（傘松公園、2,070m）、「天上大パノラマ観」（仙台山、3,390m）」である。

「天橋立十景」では、展望地や公園の開設、新たな車道の整備などにともなって天橋立を望む新たな視点が加えられたり、あるいは伝統的な視点が再評価され、全体としては天橋立の背景として広い範囲の集落や社寺、森林や田畑などを一体に眺める遠距離景を中心とする構成になっている。そして、桜山や玄妙庵からの景観など、比較的近距离にあって、目の前にせまってくるような天橋立の景観を楽しむための視点はほとんど含まれていなかった。

4. 天橋立に対する地域住民の景観評価

（1）地域住民の好きな景観と重要と考える景観

天橋立周辺で地域住民が一番好きな景観として全体として90の回答があり、指摘回数が多かったのは、傘松公園からの「斜め一文字」（指摘回数25）、天橋立ビューランドからの「飛龍観」（指摘回数17）、廻旋橋付近（指摘回数11）、玄妙庵からの展望（指摘回数7）、大天橋付近（指摘回数7）、天橋立の松並木（指摘回数7）であった。これらの個々の回答では、指摘した景観に

図-6 景観評価に用いた写真と評価結果

ついて視点の位置や見る方向、中心となる眺めの特徴など、細かな記述がみられた。また、「斜め一文字」とした回答の56%が傘松公園のある府中の住民による指摘であり、「飛龍観」では59%が天橋立ビューランドのある文珠の住民による指摘、大内峠からの「一字観」とした回答すべてがその他の区分の居住者（加悦町など）であるなど、近隣にある場所あるいはそこからの眺望を一番好きな景観としてあげる傾向がみられた。

好きな理由をみると、「天橋立の原風景だと思う」（好きな場所としてあげたのは傘松公園から見る斜め一文字観、回答者の居住地区分は府中）、「四季折々の風景が綺麗」（天橋立ビューランドからの飛龍観、文珠）、「中秋の名月の夜、橋の上から向かいの山より登る月は最高です。海に月の光がキラキラして思わず深呼吸をしてみたい」（大天橋付近、文珠）、「小さいころ廻旋橋が動くのを見てすごく楽しんでたのを覚えているから。珍しくて今でも好き」（廻旋橋付近、文珠）、「深緑の橋立で松の精気を吸いながらすがすがしい気分になる」（松並木、宮津内陸）など多様な理由があげられた。

このように、日本三景あるいは名勝として頻繁に観光パンフレットなどに用いられる天橋立の代表的な景観や、地域住民の居住地や職場の近くにある場所や、そこから眺望できる景観が多く地域住民に共通して好まれていた一方、智恩寺、獅子崎からの雪舟観、船越、桜山からの眺望など、指摘回数が1～2回であった景観が17事例あり、地域住民それぞれの思いや体験、歴史的な価値観などに基づく固有の好きな景観が存在することが示された。好きな理由では、景観としての見え方のみならず、季節感、伝説・神話、生活、水象や廻旋橋といった動きのある場面、幼少時の思い出などが好きな景観であることの重要な要素となっていた。

次に、雪舟による「天橋立図」など明治期までの図絵に基づき選定した10箇所の松林景観（図-1）の内、歴史的な松林景観として特に重要な場所3箇所をあげるという設問に対し、最も指摘回数が高かったのは、橋立明神周辺の松林景観であった。次いで、夫婦松周辺、傘松公園、智恩寺であった。これらは1922年に指定された「名勝」の範囲にあり、地域住民が眺望対象としての景観、そして歴史的に重要な松林として特に重要であると考えられる場所は、法制度上で最も古くから保全対象とされた場所と共通していた。一方、指摘回数が低いのは、滝上山、国分寺跡、板列八幡神社であり、景観保全に関する法指定が限定され、砂嘴からも回答者の居住地からも離れた距離に位置した。

（2）地域住民による7段階景観評価

図-6は、5つの写真（①大内峠周辺より望む「一字観」、②砂嘴上の松並木、③天橋立ビューランドから望む「飛龍観」、④獅子崎から望む「雪舟観」、⑤府中側から文珠方面を望む景観）について、自然性、美しさ、身近さ、好ましさ、観賞意志の5つの評価軸ごとの7段階評価の平均値を示した。全体とし

て景観としての評価が高いのは③の「飛龍観」であり、特に、美しさの評価が高かった。大部分のアンケート回答者の居住地から離れた獅子崎展望台（栗田半島）から望む「雪舟観」に対する評価は、ほとんどの評価軸で最も低かった。

「飛龍観」は、天橋立を望む視点としては比較的最近のものであるが、観光パンフレットやポスターなどに頻繁に使われ、身近で好ましい景観としてとらえられていた。②のような天橋立の近距離景でも身近さの評価が高かった。また、③、⑤のように天橋立の砂嘴と松並木の曲線が強調された景観では、自然性の評価が高かった。最も古い歴史のある「一字観」は、最近開設された展望地からの「雪舟観」より全体の評価が高く、同じ一文字の姿の天橋立の景観であっても評価に差があった。評価軸ごとの平均評価値をみると、自然性や美しさには高い評価値が与えられ、観賞意志の評価は低くなる傾向が見られた。

分散分析により属性間の平均値の差を検定したところ、男女間、年代間では、平均値に有意な差がみられなかったが、居住地区分間（表-1）では多重比較の結果、③の「飛龍観」の複数の評価軸において有意な差があった。

まず、府中と文珠の地域住民の③「飛龍観」に対する自然性および美しさでは5%有意、そして好ましさと観賞意志では1%有意の相違があった。また、文珠と宮津海岸の地域住民の間では、③「飛龍観」の自然性が（5%）、府中と宮津内陸間では③の好ましさ（5%）にそれぞれ有意な差があった。

表-1 景観評価の居住地域間での多重比較の結果

地点	評価軸	多重比較により有意差の認められた対
一字観	自然らしさ	N.S.
	美しさ	N.S.
	身近さ	N.S.
	好ましさ	N.S.
	観賞意志	N.S.
松並木	自然らしさ	N.S.
	美しさ	N.S.
	身近さ	N.S.
	好ましさ	N.S.
	観賞意志	N.S.
飛龍観	自然らしさ	文珠>府中*, 文珠>海岸*
	美しさ	文珠>府中*
	身近さ	N.S.
	好ましさ	文珠>府中**, 内陸>府中*
	観賞意志	文珠>府中**, 海岸>府中*
雪舟観	自然らしさ	N.S.
	美しさ	N.S.
	身近さ	N.S.
	好ましさ	N.S.
	観賞意志	N.S.
文珠遠景	自然らしさ	N.S.
	美しさ	N.S.
	身近さ	N.S.
	好ましさ	N.S.
	観賞意志	N.S.

N.S. は有意差が認められなかったことを示す
*は5%有意、**は1%有意を示す

以上から、天橋立周辺の地域住民においては、居住地区分にかかわらず、身近さという点では①から⑤の写真でとらえた天橋立の近～遠距離のどの景観に対してもほぼ共通した評価をしている一方、③「飛龍観」

に対しては、居住地区分によって、また評価軸によって異なる評価をしたことがわかる。「飛龍観」は、1970 年になって主に文珠自治会の投資で開園されたレジャー施設「天橋立ビューランド」を視点とした比較的新しい景観の型であり、この視点に行くための交通手段は、施設に付属するケーブルカーやリフトに限定され、入場料を含めて有料である。このことが、他の写真にはみられなかった評価の相違に関連すると思われる。

（3）天橋立周辺の景観管理に対する地域住民の考え方

まず、天橋立において今後も特に残していきたいマツとして指摘されたのは、阿蘇海周辺の視点から近距離景でありランドマーク木となるマツや、伝説などに基づいて名称があり、文化的な資産として位置づけられるものが多かった。特に、天橋立を守る会が名松としている「千貫松」や「船越の松」、「雪舟の松」など 18 本のマツは、多くの回答者が指摘していた。また、「小天橋の松林」、「濃松付近の松林」など、天橋立の中で観光上重要な場所や、マツが集中して分布する場所の松林をあげた例も見られた。その他、名前はないものの、形状が独特のマツや大木のマツ、智恵の輪など史跡や歴史的な建造物などの傍らにあるマツもあげられていた。天橋立周辺に位置していた「二本松」など、今日ではなくなくなってしまったマツの復活を願う声もあった。

天橋立およびその周辺における景観上の課題として地域住民が指摘した内容は、自然環境について、砂嘴・海岸線の保全について、松林景観について、街並みや建物について、観光地としてのあり方、ゴミ・汚染対策、という 6 つの項目に整理された。全体として、砂嘴と松並木を基本とする天橋立の白砂青松の美しさとともに、一体となる周辺の街並みや史跡、あるいは生業の様子などの人文景観をいかに調和させていくかについて強い関心があった。「天橋立のバックとなる景観に近代的な高層マンションは似合わない」、「家をはじめとした建物の色及び外壁の色が粗末」など、主な視点から望む天橋立の背景となる景観について多くの問題が指摘された。

また、マツの植樹や薬剤散布、枯死木の適切な伐採、薬剤以外の効果的な対策の研究など、多くの地域住民が何らかの手だてを通して天橋立周辺の松林景観を維持することを望んでいることが示された。「内海の水の汚れがひどい」、「周辺の海水の澄度についても遊客の関心が高い。昔のような魚群の遊泳が見られたことも風光明媚の要素である」といった指摘にみられるように、生活環境あるいは生業の場としての環境の質の向上が、天橋立における景観の質にとっても重要であると考えられていた。

5. 考察

天橋立における歴史的景観は、砂嘴と松並木によって構成される日本の名勝として典型的な白砂青松を中心として、周囲の寺社や観光施設、あるいは地域住民の生活や生業の様子などと一体となった人文景観を呈してきた。天橋立を望む数多くの視点や、名松と呼ばれるランドマーク木や寺社などの名所の存在によって生み出される多様な景観の見方、楽しみ方は、長い歴史の中で変化しながら今日に受け継がれてきた。

天橋立の景観の保全や利用がいかにあるべきかという大きな方向は、1922 年の「名勝」としての基本的な考え方（対象範囲や指定理由）に示され、それは今日の地域住民の意識の中にも顕在していた。それは、①内湾の砂嘴である、②白砂青松の美景である、③智恩寺など関連する人文景観が一体である、④天橋立を望む好適な視点がある、という 4 つの項目によって構成される。

「名勝」指定以降、天橋立周辺では砂嘴の侵食やマツ枯れなど

歴史的景観の危機があり、地元あるいは行政レベルでの真剣な取り組みがなされてきた。一方、都市化、観光開発、あるいはマツ枯れや人工林化などによって天橋立をとりまく周囲の景観は大きく変化し、その人文景観のあり方が大きく問われている。指定要件の①、②という砂嘴上の松林の景観保全には強い関心と具体的な施策が払われてきたものの、③、④に示された、眺望を楽しむ人文景観としていかにあるべきか、といった観点からの計画や、実際の景観管理は不十分であったといえよう。

今後は、天橋立周辺の景観に対する地域住民の思いや評価での共通点や相違点をふまえ、天橋立周辺の人文景観を一体としてとらえた広域レベルでの計画や管理に反映させることが急務である。そのためには、まず、身近にある視点や空間の意義をとらえ直しながら、地域住民と景観との関わりを 1 つ 1 つ築き上げていく作業が必要である。例えば、桜山など身近にある伝統的な視点の再評価や、すでに枯死してしまった名松の復活などにより歴史的景観を現代に活かす作業が可能であろう。新たな視点を発掘して違った景観の楽しみ方を提案することにより、地域住民それぞれの体験や思いを実際の景観管理につなげる仕組みが求められている。

謝辞

本研究を進める上では、山崎俊夫会長（当時）をはじめとする「天橋立を守る会」の皆さま、そして京都府、宮津市の行政担当の方々に多大な協力をいただいた。専門的な立場より、京都府立丹後郷土資料館の伊藤太氏および宮津市歴史資料館の中嶋陽太郎氏に貴重なアドバイスをいただいた。また、本論に使用した絵はがきの写真はすべて宮津市歴史資料館から許諾を受け掲載した。心からの感謝の意を示したい。

引用文献

- 1) 小室洗心（萬吉）編（1938）：天橋立集：橋立集刊行後援会
- 2) 宮津市教育委員会編（2002）：宮津市歴史資料館開館記念 天橋立展：宮津市教育委員会、15pp
- 3) 若杉準治監（1999）：智恩寺と天橋立：天橋山智恩寺、138pp
- 4) 永浜宇平編（1930）：天橋立智恩寺、108pp
- 5) 木下幸吉編（1938）：丹哥府史：龍燈社出版部、660pp
- 6) 長谷川成一（1996）：失われた景観 名所が語る江戸時代：吉川弘文館、73-102
- 7) 藤岡謙二郎（1977）：地理学と歴史的景観：大明堂
- 8) 浅香勝輔・足利健亮・桑原公徳・西田彦一・山崎俊郎（1987）：歴史がつくった景観：古今書院、318pp
- 9) 吉津地区公民館（1982）：よしづ 変遷写真集.
- 10) 吉津地区公民館（1995）：吉津地区 歴史年表.
- 11) 宮津市教育委員会・宮津市老人大学（1990）写真でつづる みやづの今と昔：宮津市老人大学、67pp
- 12) 与謝地方林業研究会（2001）：宮津・与謝地方林業年表 1867～2000 年、55pp
- 13) 宮津市史料編さん委員会（2001）：宮津市史 史料編 第 3 巻：宮津市、1035pp
- 14) 宮津市史料編さん委員会（2001）：宮津市史 史料編 第 4 巻：宮津市、1008pp
- 15) 樋口忠彦（1976）：景観の構造：技報堂、168pp
- 16) 京都府都市計画課（1954）：公園管理のかずかず（その八）天橋立の樹木について
- 17) 京都府立大学農学部（1985）：京都府立天の橋立公園の松並木保護管理対策調査報告書、107pp
- 18) 芦原義信（1990）：続・町並みの美学：岩波書店、65-74
- 19) 嘉名光市・斉藤潮（2000）：主要眺望点における天橋立の形状に関する研究：ランドスケープ研究 63(5)、593-598
- 20) 常光徹（1999）：股のぞきと狐の窓－妖怪の正体を見る方法：常光徹編 妖怪変化：筑摩書房、234pp
- 21) 小室洗心編（1935）：栲嶺志：京都府与謝郡岩滝町役場、110pp
- 22) 宮城唾亭ら（1952）：宮津天橋立ロマンス集、51pp
- 23) 宮津市歴史資料館（2003）：常設展示案内、65pp